

この日を覚えていなさい！

出エジプト 13 章 1～22 節

「この日を覚えていなさい。」 出エジプト 13:3

イスラエルの人々が、神の約束の地、乳と蜜との流れる地、そのカナンに住むためには、肉の国エジプトを脱出しなければなりません。しかし、彼らがそのエジプトから、奴隷の家から出ることは、それは至難の業でした。もしも、あの神様の力強い御腕がなかったなら、彼らは到底、出エジプトを実行することは出来なかったでしょう。

それにしても、前回と今回とのメッセージを通して、どんなにか神様が私たちを愛し、守り、導こうとしておられるかを知る事ができます。

今日は、そんな神様が私たちの為になされたみ業を幾つか、確認しましょう。

——— 第 1、寝ずの番をされた神様 ———

(12:42 節)「主が寝ずの番をされた。」

いよいよ明日、エジプトを脱出します。すでにすべての準備が整っていました。しかしそれでも、何が起こるかわかりません。(ファラオの気が変わるかもしれません、エジプト人が攻めて来るかも知れません。イスラエル人の気持ちも変わるかもしれません。天候はどうでしょう、嵐は・・・、思いがけない事件が万が一、起こるかも知れません・・・) その万が一が起こらない様に主は、寝ずの番をされたのでした。

——— 第 2、民を救い出された神様 ———

イスラエルの人々が、神様の約束の地、乳と蜜との流れる地、カナンに住むためには、まず肉の国エジプトを脱出しなければなりません。しかし、彼らがそのエジプトから、奴隷の家から脱出することは本当に大変なことでした。

(3 節)「・・・この日を覚えていなさい。**力強い御手で**、主があなたがたをそこから導き出された・・・」この神様の強いみ腕がなかったら、彼らは到底出エジプトを行うことは出来なかったでしょう。しかしついに、神様は立ち上がられました。

実は 3 節と同じみことばが、9 節、14 節、16 節にも繰り返されています(読んでみましょう)。実際にイスラエルの一人一人がエジプトでの奴隷から解放され、一国民となるに至ったこの歴史は、ただ神様の力、神様の御手によってなされた奇跡です。確かにモーセ、アロンも活躍したでしょう。モーセもアロンも素晴らしい指導者でした、素晴らしい働きをしました。しかし、その彼らを用いられたのは神ご自身でした。モーセではなく、神様がイスラエルをエジプトから、救い出されたのです。

あのロトと彼の妻と二人の娘の救出の時もそうでした。

(創世記 19:16 節)「・・・するとその人たちは、彼の手と彼の妻の手と、二人の娘の手をつ

かんだ。これは、彼に対する主のあわれみによることである。その人たちは彼を連れ出し、町の外で一息つかせた。」神様は滅びの世界から、その外へと救い出されるお方です。

確かに、もうあとがない時は、神様は強引に救いの御業をなさる神様なのですね。

——— 第3、弱い民を守り、配慮される神様 ———

主は、イスラエルをご覧になって、この弱い民を守り、配慮なさいました。

・第1に、(5～7節、読む) 主は、過越しの祭りを祝い、種なしパンを食べる様に勧められました。

実は、イスラエルの人々の中には、せっかくエジプトを脱出しながらも、その後(あと)にして来たはずのエジプトの地をいつまでも恋焦がれる者たちがおりました。この様な人たちは、荒野で挫折してしまう危険性があります。もちろん約束の地には入れないでしょう。彼らはエジプトを出ながら、心の中にエジプトを持って来てしまったのです。実際に、信仰に入ってから、途中で信仰を捨ててしまうほど残念なことはありません。

イスラエルの人々は過ぎ越しの祭りを祝いましたが、彼らはこの日から 7 日間種を入れないパンを食べなければなりませんでした。それは、古いエジプトのパン種がいつまでも彼らのうちに残らないためでした。

・第2に (17、18節、読む) 「神は、・・近道であっても、ペリシテの道には導かれなかった。」 神様は、イスラエルの民が近道をするのを許されませんでした。神様は、民がペリシテとの戦争に恐怖を覚えて、エジプトに帰りたくなる恐れがあったので、あえて近道を避けて遠回りをさせました。そして、荒野の道へと導かれました。

確かに約束の地へ行くのに、ペリシテ人の国を通れば近道でした。しかし、そこにはペリシテ人との戦争の恐れがありました。その時、民がその恐れの中で、ここに来たことを後悔するかもしれません。そこで神様は、エジプトに帰りたいたいという思いを民が持つことのないようにと配慮なさいました。そして今あえて民を遠回りさせて、紅海の荒野へと導かれたのでした。

信仰の生活はエスカレーターではありません。常に私たちは決断の中に立たされています。しかし、人間の力が及ばなくなると、祈る事も出来なくなると、神様は先頭に立たれます。そして、導かれます。「雲の柱、火の柱」(21節)は動き出すのです。私たちは従うのみです。

——— 神様が導かれる道 ———

それにしても、神様が導かれる道は、必ずしも近道ばかりとは限りません急がば回れとも言いますが、神様が導かれる道は、小道、でこぼこ道、困難な道、そして遠回りの道かも知れません。しかし、神様が導かれる道はたとえ困難な様に見えても、実は最善な道なのです。その道以外の道に、人は行ってはいけないのです。

(詩篇 16:11 節) 「あなたは私に いのちの道を知らせてくださいます。」

それにしても、どこまでも子を思う母親の、その心のやさしさを神様の中にみるのです。

私が幼かった頃の思い出です。夏、友達と海に出かけました。私は大きな浮き輪に寝そべって、うつらうつらしていましたが、目が覚めると、あたりには誰もいません。すぐ近くと思っていた陸地ははるか遠くです。一緒に来た友だちたちはいっせいに陸に向かって泳いでいます。気が付きました。寝ている私を皆でそっと沖の方に引いて行ったのです。やられたと思いました。でも、そこは海水浴場でしたから、遠浅です。半分安心はしていましたが浮き輪から降りると、水は私の首のあたりまで来ていました。とにかく、浮き輪を離さないようにして、途中で深い所があったら大変ですから、ぴょんぴょんとスキップするようにして陸を目指しました。それにしても海は広いのです。なかなか海岸が近づいて来ません。波が来ると顔にぶつかります。それでも半分くらいの距離になると、やっとお腹の辺りまでになってきて、少し安心しました。海岸にたどり着くと「おめえ、泳げなかったのか」です。

海の底はでこぼこでしたから、一瞬溺れることも考えました。また、浮き輪と共に沖に流される不安も横切りました。しかし、深い所に足を踏み込むことなく陸地に向かうことができました。それにしても、この広い海の中で私は夢を見ているようでした。スキップしながら何かに包まれているような不思議な感じでした。海から上がってからいたずらをしたガキ大将たちに腹も立ちませんでした。漠然としてはいましたが、広い海いっぱいには私は守られているのだ、という思いにつつまれていました。確かにあの時、神様は見えない海の底に安全な、道をつくってくださったのではないかと、そして私と共にいて、海岸まで導いてくださったのではないかと、私はそう感じました。何とも言えないのですが、この不思議な経験は今でも、残っています。そして、今も私は神様の臨在の中にいてスキップしながら御国を目指す日々の中にいます。見えない現実も多いのですが大丈夫、平安です。

さて、神様がなされた御業、その四です。

——— 第4、約束を忘れない神様 ———

(19 節、読む)「モーセはヨセフの遺骸を携えていた。」以前ヨセフはイスラエルの子らに頼みました。「私の遺骸を約束の地に葬るように」と。神様は約束を忘れていませんでした。

(創世記 50:24～26 節)「ヨセフは兄弟たちに言った。『私は間もなく死にます。しかし、神は必ずあなたがたを顧みて、あなたがたをこの地から、アブラハム、イサク、ヤコブに誓われた地へ上らせてくださいます。』ヨセフはイスラエルの子らに誓わせて、『神は必ずあなたがたを顧みてくださいます。そのとき、あなたがたは私の遺骸をここから携え上ってください』と言った。ヨセフは百十歳で死んだ。彼らはヨセフをエジプトでミイラにし、棺に納めた。」

(ヨシュア 24:32 節)「イスラエルの子らがエジプトから携え上ったヨセフの遺骸は、シェケムの地、すなわち、ヤコブが百ケシタでシェケムの父ハモルの子たちから買い取った野の一画に葬った。そこはヨセフ族の相続地となっていた。」

確かに、神様はあなたの祈りを聞いておられます。それを忘れてはおられません。

——— 第5、最後まで、面倒を見て下さる神様 ———

(20～22 節、読む)「主は、昼は・・雲の柱、・・夜は・・火の柱の中にいて、彼らの前を進まれた。」神様は、イスラエルをエジプトから救われた後も、民を見守り、責任を持って導かれる神様です。「・・雲の柱、・・火の柱」これは、驚くべき、神様の心のこもったご配慮です。雲の柱、そして火の柱がいつも彼らの上にとどまっているこの事実は、神様がイスラエルの民と共におられるしるしでもありました。そして、雲の柱、火の柱は、いつもいつも、民に行くべき方向をしめし又、留まる場所を教えているのでした。

最後に、詩篇 121 篇 3～8 節を読みましょう。

「主は、あなたの足をよろけさせず あなたを守る方は まどろむこともない。

見よ イスラエルを守る方は まどろむこともなく 眠ることもない。

主はあなたを守る方。主はあなたの右手をおおう陰（かげ）。

昼も 日があなたを打つこともなく 夜も 月があなたを打つことはない。

主は すべてのわざわいからあなたを守り あなたのたましいを守られる。

主はあなたを 行くにも帰るにも 今よりとこしえまでも守られる。」

私たちも、いつも雲の柱、火の柱に守られています。ですから、昔のイスラエルの人々と同じように、絶えず神様の臨在と指導の下に、この神様を信頼してこれからも共に前進してまいりましょう。